

近代期朝鮮人の移住と定住化の形成過程とアイヌ民族

——淡路・鳴門から日高への移住に関して

石 純姫（苫小牧駒澤大学）

キーワード：朝鮮人、アイヌ、定住化、重層的アイデンティティ、樺太アイヌ

はじめに

近代期北海道における朝鮮人の移住と定住化の形成過程には、強制的な労務動員の現場から脱出した朝鮮人とそれを匿い支援したアイヌ民族との繋がりが深く関わってきたことを、これまで明らかにしてきた。主に、それは戦時下における強制的な労務動員や、労働現場におけるものが中心であった⁽¹⁾。

しかし、調査の早い段階で、1870年（明治3年）に北海道平取本町で、朝鮮人の男性とアイヌの女性との間で出生している人がいることが明らかになっていたが、この早い時期の朝鮮人の移

住がどのようなものであるのかは、依然として解明できず、サハリンでの朝鮮民族やアイヌ民族、その他多くの民族の共住の時期がこのような北海道への移住とかかわるのではないかと推測するにとどまっていた⁽²⁾。

尚、「日韓併合」以前や直後における在日朝鮮人についての研究には多くの蓄積がある⁽³⁾。金英達によると、日本において、朝鮮人労働者が最初に登場するのは、1906年の鹿児島線敷設工事における鹿島組の資料である⁽⁴⁾。鹿島組、間組による鹿児島線敷設における朝鮮人労働者に加え、京都府富士川電気工事、福岡の炭山労働などに、300名規模の朝鮮人労働者が従事し、少なからぬ犠牲者を出していることが明らかになっている。

しかし、江戸期の最後期、或は明治期の最も早い時期の在日朝鮮人については、全く記録が

- (1) 石純姫「アイヌ集落への朝鮮人の定住化の形成過程について」2004年度財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構研究助成(中規模研究)報告書『前近代アイヌ民族における交通路の研究(胆振・日高I)』2005年、31～55頁
石純姫「北海道近代における朝鮮人の定住化とアイヌ民族」『東アジア教育文化学会年報』第三号、2006年、1～8頁
石純姫「胆振・日高地方のアイヌ集落における朝鮮人の定住化について—近代化のなかのアイヌ民族と朝鮮人」2005年度財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構研究助成報告書、2006年、1～31頁
石純姫「北海道における朝鮮人強制連行」『東アジアにおける戦争記憶植民地記憶の保存と表象に関する国際的総合研究』平成19・20・21・22年度科学研究費補助金による研究(基盤研究(B)4年間)報告書、2010年、49～61頁
石純姫「記憶の継承と記述の間—サハリンにおける朝鮮人」『東アジアにおける戦争記憶植民地記憶の保存と表象に関する国際的総合研究』科学研究費補助金による研究(基盤研究(B)4年間)報告書、2010年、63～83頁
石純姫「アイヌ民族と朝鮮人をめぐる記憶と表象—日高地方を中心に」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』第9号、2012年、41～48頁
- (2) 石純姫「前近代期の朝鮮人の移動に関する一考察—北海道における在日朝鮮人の形成過程とサハリンアイヌの関係をを中心に」『苫小牧駒澤大学紀要』第18号、2007年、145～166頁
- (3) 木村健二・小松裕「四一道府県における在留朝鮮人」木村健二、小松裕編『史料と分析「韓国併合」直後の在日朝鮮人・中国人—東アジアの近代化と人の移動』明石書店、1998年
小松裕・金英達・山脇啓造編『「韓国併合」前の在日朝鮮人』明石書店、1994年
宮嶋博史・金容徳編『日韓共同研究叢書2近代交流史と相互認識I』慶応義塾大学出版会株式会社、2001年
- (4) 金英達「在日朝鮮人社会の形成と1899年勅令第352号について」『「韓国併合」以前の在日朝鮮人』1994年、24頁～26頁

なく、これまで明らかにされた論文等も、管見の限り筆者が記したものを以外は見当たらない。

ロシアにおける近代初期の朝鮮人の移住については、アナトリー・T・クージン『沿海州・サハリン 近い昔の話（翻弄された朝鮮人の歴史）』に詳しい。ロシア沿海州における最初の朝鮮人移住の記録としては、1862年ポシェット地区チジンへ川沿いに移住したとする文書があり、1864年には朝鮮人60世帯が沿海州に定住化し、1868年には165世帯、1869年には766世帯、1884年には移民総数が5500人にまで達していたことが記されている⁽⁵⁾。一方、クージンは「サハリンで初めての朝鮮人が現れるのは、1870年代～80年代であることは疑いない⁽⁶⁾」として、1897年に行われたロシアの第一回国勢調査資料により、サハリンの人口約2万8千人のうち朝鮮人が67人であることを明らかにしている。尚、この国勢調査で、サハリンに定住していた日本人は227人だった。

一方、日本の近代史においては、明治期の初期に、兵庫県の淡路・鳴門地域から北海道の静内や新冠など日高地方への移住者がいたことは、よく知られている。2014年3月19日～25日に行った科学研究費の助成による調査において、この淡路、鳴門地域から和人同様に、多くの朝鮮人が「馬喰」として北海道に移住していたことの一部が明らかになった。これらの朝鮮人は、かなり早い時期にアイヌの女性と結婚して定住化していたが、その理由が明らかになりつつある。

本稿では、こうした明治期の初期の淡路・鳴門地域から北海道・日高地方への朝鮮人の移住と戦時下におけるアイヌ民族と朝鮮人の繋がりについて、新たに明らかになったことを記述する。

1. 淡路から日高への和人の移住

淡路島が古くから朝鮮と関わりが深かったことは、『日本書紀』『古事記』『播磨国風土記』に記述されており、多くの文献で明らかにされている。ところで、淡路島の西海岸、江尻の江善寺には「高麗陣打死衆の碑」が建立されている。豊臣秀吉の朝鮮侵略の際に犠牲となった村の若者の追悼碑である。この淡路島江尻西浦に元江州浅井朝倉の家臣で信長、秀吉の治世に浪々となり流れてきた22人は秀吉暗殺を企てていた。淡路の各地で朝鮮侵略への動員のために「唐渡」という家数人数帳の提出が義務付けられ、漁民、農民は過酷な賦課を強いられた。浅井の家臣たちは秀吉打倒は果たせなかったが、朝鮮の宝物を略奪して大阪へ搬送中の小西行長の家臣を襲撃し、薬師如来等の掛け軸三軸を持ち帰り、寺を建立し、多聞院江善寺と号した。辛基秀は「朝鮮侵略に駆り出された西浦の漁村には、浅井の家臣たちを受け入れるだけの秀吉批判の共通のうらみがあった⁽⁷⁾」と述べる。

このことは、豊臣秀吉の朝鮮侵略の際、拉致された朝鮮人が数名おり、淡路島の西浦ではその人々が亡くなった際に墓を設けている事実とも符合する。秀吉の朝鮮侵略に際しての賦課に対する不満、秀吉批判があったことから、拉致した朝鮮人に対しても、墓を建立したり同情の念を抱いていたことがわかる。韓人慰霊碑は以下の通りである。「韓人墓 文禄中朝鮮の役韓人三人を獲、之を仁木又五郎に賜ふ死して此に葬る⁽⁸⁾」

また、「川島城跡には、朝鮮女の墓が建立されているが、林道も蜂須賀家政に従って朝鮮に出陣したこと上記のごとくで、帰国に際して連れ帰ったものごとく、遠く離れた異域の土地で、時には帰郷の念にかられつつ寂しく生涯を終わった異邦人である。同情の念禁じ得ない後世の人々のまなざしの下に、今もひっそりたたずむかのごとくである⁽⁹⁾」とある。

(5) クージン・T・アナトリー著、岡奈津子・田中水絵訳『沿海州・サハリン 近い昔の話（翻弄された朝鮮人の歴史）』凱風社、1998年、22頁

(6) 同上書、171頁

(7) 辛基秀「江州浅井・朝倉の遺臣と雨森芳洲」淡路朝鮮文化研究会『あわじ島そしてむくげの国』1986年、10頁

(8) 佐野之憲編『阿波誌』1976年、360頁

(9) 川島町史編集委員会編『川島町史』上巻、1979年、258頁

徳島藩と淡路の稲田家との間には、長年にわたる複雑な関係性が続いたが、版籍奉還をきっかけとして、「稲田騒動」「庚午事変」と呼ばれる事件に至った。この事件についての詳細は、平瀬金蔵『稲田騒動』、それをもとにした『静内町史⁽¹⁰⁾』、郷土史研究家高田知幸氏による講演会資料集『北の百年⁽¹¹⁾』に詳細が記述されている。概略を述べると、戦国時代、織田信長のもとで盟友だった稲田家が、秀吉の時代に功績の俸禄を辞退し、蜂須賀に譲り、江戸時代には、洲本城代になった。表向きは主従関係であったが、稲田家は大名並の石高があり、徳島藩をはるかに凌ぐ重臣・家臣数を有していた。

徳島藩は稲田家を家臣として見做す一方、稲田家は徳島藩に名誉を譲った意識が強く、主従関係ではなく、対等な士族であるという意識があった。

明治2年の版籍奉還の際、稲田家が家老以外卒族（従卒）となり、一挙に碌を失うことについて、稲田家からは稲田を本藩同様の取り扱いをするよう藩庁への度重なる陳情が行われたが、却下され続けた。稲田家の中からは徳島藩からの分離独立運動が起こるに至り、勤皇運動において親しい関係であった岩倉具視、有栖川ノ宮への直訴となる。

こうした経緯から、中央政府は稲田に北海道開拓を命じ、徳島藩にその費用を負担させることとした。しかし、稲田家、徳島藩双方がこの命には応じ難く、徳島藩では、武力によって稲田を制圧する動きへと展開した。

「庚午事変」とは、こうした経緯によって、明治2年5月13日に、徳島藩の800人の兵隊と大砲4台により、稲田家の別邸や教育所であった益習館、重臣宅が襲撃された事件である。稲田家は無抵抗だったが、女性と子どもを含む37人が死傷し、2名が自殺に追いやられた。

このような事件の結果、明治政府は稲田家に対して明治3年（1870年）、北海道への移住を命じた。稲田家は旧所領1万4千石をまとめて兵庫

県に移し、徳島藩から分藩し、開拓費用を兵庫県から捻出させた。

稲田家には、静内郡と色丹島の「開拓」が命じられると同時に、徳島藩に「開拓」を命じていた新冠郡をも「支配」することが命じられた。

1871年（明治4年）5月2日に稲田の家臣団は、静内、新冠に到着した。ここで稲田家の人々は初めてアイヌの人々と接触した。その様子は以下の通りである。「静内郷土人は総て染退川沿岸に住し、鮭乾魚及鹿肉の干したるもののみを常食とするを以て、毫も耕作をなすものあらず⁽¹²⁾」

北海道は、「土人」とされるアイヌの人々が漁労や狩猟を行っていた未開の地として記述されている。これは、『開道五十年記念北海道再版』において、編著者である函館鴻文社主幹の澤石太の次の序の記述にある視点と同様である。

「我北海道の地たるや、蝦夷と称して、久しく茹毛飲血習を為せる夷族の蹂躪に委したけれども⁽¹³⁾」

北海道に先住していたアイヌ民族への認識は、「茹毛飲血習を為せる夷族」即ち生肉を食べ、その血を飲む野蛮な民族というものであり、さらに「蹂躪に委した」ということは、「暴力によって踏みこむことを放置していた」ということである。アイヌ史の研究が進む中、このような認識が現在も存続しているとは考え難いが、当時のこうした意識によってなされていく「開拓」が、どのようなものであったのかは、郷土史など公的記録やその他の文献に多くの記述が残されている。

『開道五十年記念北海道再版』は、道外から北海道へ移住し、苦難の末、成功した人々を顕彰しているものだが、そこには、淡路洲本から静内へ移住し、畜産業によって財を成した人々が少なくない。その中には、アイヌの人々の新冠姉去から貫気別への強制移住に関わった浅川義一の記録もある。「地方農業界の新鋭」として『開道五十年記念北海道再版』における浅

(10) 静内町史編さん委員会『増補改定静内町史 上巻』1996年、276～288頁

(11) 高田知幸『北の百年—稲田騒動と移住その後—』2014年、1～3、6～10頁

(12) 前出『増補改定静内町史 上巻』289頁

(13) 澤石太編著『開道五十年記念北海道再版』鴻文社、1921年、7頁

川義一の記録の一部は以下のものである。

「明治四十年四月新冠御料牧場舊土人の給與地の監理を命せられ爾後専ら土人の授産方法を講じて物質精神兩界の開拓に努力する事實に十星霜、後大正四年に至り河流郡貫気別の土地の給與を受くるに至れり、先之二千有餘圓の土人の貯金を為さしむあり於是如何にせば彼等土人をして安心立命の域に達しむべきやの點に關じ焦心苦慮の結果、實弟健茨郎を彼地に派し土人に對する犠牲的好情けを以て彼等を指導誘掖せしめ其成績好良なるものあり、義一多年の努力は土人の授産上及其精神界に多大の高架を寄与したるもの甚大なり、今や御料牧場貸地の耕作に従ひ資産年と共に加はり同地屈指の新智識として盛名綽々たり⁽¹⁴⁾」

新冠の御料牧場の管理を任せられ、アイヌの人々を教導したということだが、アイヌの人々の貯金二千元を使用して、貫気別という奥地へと移住させたということである。そして自らは御料牧場で資産を増し、屈指の名士となったということが顕彰されている。

一方で、現在、平取町貫気別旭（旧上貫気別）には、笹藪の中にアイヌの人々の墓地があり、そこに一つの碑が建立されている。現在でもこの地域は草深く、小さな林道の脇を数十メートルほど入っていったところにあり、滅多に人が訪れる場所ではない。この碑の存在を知る人は決して多くはないと思われる。墓地整備条例により、多くの墓地ではアイヌの人々の遺骨も含めて掘り起こされ、和風の墓石に変わっていったが、この墓地は、笹藪のままである。しかし、北大開示文書研究会により明らかにされた北大医学部『アイヌに関する研究報告一覧』「第1解剖移管」では、この上貫気別から発掘された6体（成年男子3名、成年女子2名、老年男子1名）のアイヌ人骨が現在北大に保管されていることが記述されている。その原籍は姉去のものは1体、4体は新冠郡元葛籾村で、他1体は新冠郡元神辺村である⁽¹⁵⁾。碑は1990年8月に平取町によって作られたものである。

碑文は、以下の通りである。

「平取町は肥沃な大地と豊かな自然に恵まれその開拓は古く父祖は昼なお陽光の届かない原生林に挑み上貫気別を開いた明治大正の馬耕時代及び軍用馬生産のため新冠牧場は拡大され御料牧場へと変遷したが1915年（大正4年）姉去コタンを終われ上貫気別に強制移住になった人々の悲しさには壮絶なものがあった この郷土に開拓の心血を注ぎ根を下ろした先駆者の事績を後世に伝え諸霊に参列者のみな様と共に鎮魂の誠を捧げます 平成二年八月 平取町長 安田泰郎」

ひとつの事実をどちらの側の視点から記憶し、表象するかということについての対照性を表す典型的な一例である。あくまでも北海道の「開拓」の成果を記念した『開道五十年記念北海道 再版』は、淡路洲本からの移住者が、アイヌの人々の授産に関わり「安心立命」の地へと移住させたとする和人の顕彰の物語である。しかし、その事実はアイヌの人々にとって、もともと「安心立命」であった姉去からの悲惨な強制移住の歴史であり、そこでの開墾がいかに困難で過酷なものであったのかを記す公的な表象が存在することもまた事実である。

また、静内に移住してきた稲田家の人々の中に、平取の貫気別・振内でクローム王となった八田満次郎の存在がある。八田満次郎の生涯を語る著述のなかに「日高の馬か、馬の日高かと言はるる日高は、和人の移住後は農業方面の開拓は餘り思はしくなかつた。原始的な漁業の外に日高國の進むべき途は、畜産日高であることが先覺者により提唱實行されつつあった」とある⁽¹⁶⁾。

2. 朝鮮人の定住化とアイヌ民族

民衆史の掘り起しが進むなかで明らかにされてきている事実も多く蓄積されているが、本稿においては、もっとも抑圧された数多くの方々の記憶と証言を記録することによって、公的記

(14) 前出『開道五十年記念北海道 再版』488頁

(15) 北大開示文書研究会 <http://hmjk.world.coocan.jp/materials/list.html>「第1解剖移管」

(16) 矢武伊太郎『後藤翁と八田翁』北海道クローム増産研究会、1944年、63頁

録から削除され、忘却された歴史を明らかにしていきたい。

前節でたどった稲田藩（家）の静内、新冠への和人の移住と同時に、後に詳述するが、「馬喰」として鳴門から鷓川や静内へと移住した朝鮮人がいた。この人々は、鳴門で馬や牛を農家と売買していた。

江戸時代から鳴門・淡路地区において、馬の飼育は農業耕作や軍用予備のために保護奨励されていた。1629年（寛永6年）には大毛島に15匹の馬を放牧し、鳴門の海に棲むという海驢と混血させ、水陸両用の良馬の創出を図ったという伝説もあり、藩馬育成のための牧場が設置された⁽¹⁷⁾。

この牧場は1869年（明治2年）に廃止されたが、軍馬用の飼育は全国的に普及していく。鳴門地区においても平時は農作業に欠かせない馬も、日清・日露戦争の頃から減少し始める。外国馬に対して日本の軍馬が体躯・能力共に劣ることが明らかになり、馬の飼育頭数は、更に減少していった。その一方で、食用としての牛の飼育が増加していく⁽¹⁸⁾。

当時は、牛馬は牧畜の対象ではなく、耕耘のための役畜であり、地力の増強をはかる堆厩肥生産用の家畜であり、その増加を各地区で割り当てたのも、特に米作農業の向上を目的としていた。従って、牛と馬の区別自体もそれほど重要ではなかった⁽¹⁹⁾。

馬の売買に関しては、博労、伯楽、馬喰、牛馬商、家畜商と時代によって、その呼称が変遷した。博労や伯楽の時代には、馬の善悪を鑑定し、売買交換、周旋を行っており、病気に関しては伯楽が漢方薬や灸、刺針、瀉血を行っていた。馬一頭は300円ほどで、非常に高値であった。貧乏な農家では馬を飼う資力がなことから、博労の世話で万人講といって、二人一組で十数組を組織して各地方へ依頼に行き、集金し

た金で馬を買って農家に渡す、「縄堅（つながた）め」という方式を取っていた。その中には、農家をだます悪徳商人もおり、博打、博労、掬りすったくろうなどという陰口もあったという。商人どうしが手を袖の中に入れて指の折り方とか握り方で値段を決めるので、立会人にもどのくらいの相場でやり取りをしているかが分からないという⁽²⁰⁾。やがて、博労や馬喰は免許制度になり、牛馬商試験を受験し、資格を要する職業になった。しかし、初期の頃には、そのような厳しい資格を持つ者だけが馬喰であったわけではないだろう。

大正末期には、役、肉牛に適し、飼養管理が容易な朝鮮牛（赤牛）が農家に好まれ、数多く導入・飼養された。大正14年度における朝鮮牛の平均相場を見ると、肉牛が牝267円50銭、牡260円50銭、その他の成牛は牝220円38銭、牡243円84銭、子牛は牝118円24銭、牡94円75銭であった⁽²¹⁾。

つまり、明治期から大正にかけて、馬喰は、鳴門・淡路において、重要な商いであり、大正末期から朝鮮の牛が輸入されるようになると、この地域に朝鮮人が移住していたことも当然考えられる。

徳島空港のすぐ北側にある里浦地区では、農耕に牛を使っていた。杉浦茂吉氏（徳島市里浦在住89歳）は⁽²²⁾、「若い頃、北海道から馬を買って、農耕馬として七、八頭を所有した。昭和18、9年頃のことが、農家は80軒くらいあり、牛を使っていたのは15軒ほどで、あとは馬を使っていた。馬は2、3年すると馬喰が来て連れて行った。この地区では、芋や麦などの耕作が行われており、牛が農耕作業にとって重要であった。ここでは6か月ほどの子牛を農家に売りにくる専門の業者がいた。そしてその牛が大きくなると、2、3千円で買い取っていく」、と証言した。

(17) 鳴門市編纂委員会『鳴門市史 上巻』鳴門市、1976年、1440頁

(18) 前出『鳴門市史 上巻』1074頁

(19) 前出『鳴門市史 上巻』1077～1079頁

(20) 篠原雅一『阿波商売今昔』徳島県出版文化協会、1976年、24頁

(21) 前出『鳴門市史 上巻』1084～1085頁

(22) 2014年3月24日、杉浦氏宅にて聞き取り

里浦地区の北方にある大毛地区は、鳥取砂丘の小さな規模くらいの砂しかない地域だった。現在でも芋や麦を耕作している。鈴木岸夫さん（大毛在住86歳）によると⁽²³⁾、開墾を始めた頃の農家は一軒に一頭の牛を飼っていた。馬喰がこの地域に、6か月くらいの子牛を5～10匹くらい連れてきた。それから一年、その牛を飼って、砂浜でまっすぐ歩けるように訓練し、農耕に使えるぐらいに大きくなると、馬喰が2、3千円で買い取っていく。その馬喰は里浦から大毛にやって来ていた。このように、2、3日おきに大毛地区の農家に小牛を預け、一年半ほどして買い取りに来る、という馬喰がいたという。小さな農家はそのくらいで、大きな農家では2、3歳の牛を飼っていたという。60～70aが平均的な農家で、1ha以上の農家はそれほど多くなかったという。

また、この地区には追分といって、現在の山上病院の裏側に、馬を放牧していた場所があった。そこには石垣上になった場所があり、その手前にはすり鉢状になった地形で馬の骨を捨てる場所があった。

そこからさらに北上した鳴門海峡に近い地区においても、馬喰が子牛を持ってきて、一年後に大きくなった牛を買い取っていく、ということが行われた。この地区においては、馬喰が朝鮮人であったという証言が得られている。

土産店「福池商店」の福池トモエさんによると⁽²⁴⁾、里浦には馬喰が多く、朝鮮人も多かった。里浦地区では農耕に馬と牛を六対四の割合で使役し、田は馬、畑は牛が耕していた。馬喰が子牛を連れてきて、しばらくすると、医者が去勢にきた。牛が大きくなるとまた馬喰が来て、大きくなった牛と子牛を交換した。

粟津地区では、田がなく、畑が多かったので、牛の交換がなされ、大津地区、川内地区では田

が多かったので、馬が多く交換された。中でも川内町は種馬が二頭いて、周辺の地区では一番馬が多い場所だった。

徳島市周辺から鳴門に至るまで、牛や馬の耕作は耕作物によって細分化され、使用方法が分かれていたのである。鳴門地区では、このような馬喰の中に朝鮮人が多くいたことが複数の証言から明らかになった。

アシリレラ（山道康子）氏の母親の父親が、鳴門から鶴川に馬喰として移住し、鶴川でアイヌ女性と結婚したことが明らかになっている。

「母親は母方が樺太アイヌで父方は朝鮮人でした。この朝鮮人の父親は鳴門から馬喰として北海道鶴川に渡り、そこで口に入れ墨をしたアイヌの女性と結婚したそうです。そのような朝鮮人の馬喰は当時、珍しいものではなく、静内にも多かったそうです。⁽²⁵⁾」

このアシリレラ氏の父親が、鶴川に居住していたのは1907年前後である。また、静内でも、多くの朝鮮人が馬喰として働いていたことをアシリレラ氏は証言している。

鶴川の開発は牧畜業から始まったと言われている。汐見地区における農地開墾と馬との関係は極めて深く、明治末期から農耕用として一頭ないし数頭の馬を放し飼いしていた農家もあったという⁽²⁶⁾。

大正から昭和にかけて、鶴川の汐見地区では馬を所有する農家が徐々に増え、昭和5、6年頃にはほとんどの農家が馬を飼うようになっていた。当時は一頭70円から90円だったという。当時、数十頭の道産馬を飼育していた人の中には、アイヌの人々が多かった⁽²⁷⁾。これまで見てきたように、明治の末期から大正初期にかけて、朝鮮の人々が馬喰として鳴門地区から鶴川へと移住してきたことは、きわめて自然ななりゆきともいえる。

(23) 2014年3月24日、鈴木氏宅にて聞き取り

(24) 2014年3月23日、福池商店にて聞き取り

(25) 石純姫「科学研究費助成事業中間報告書 2012～2014年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）北海道における朝鮮人の移住 アイヌ民族とつながりにおける重層的アイデンティティ）」<http://www.t-komazawa.ac.jp/pdf/soku.pdf> 68～69頁

(26) 汐見二区沿革史編集委員『汐見二区沿革史大地は語り継ぐ』鶴川町汐見二区自治会、1987年、94頁

(27) 前出『汐見二区沿革史大地は語り継ぐ』95頁

東京都港区南麻布にある「在日韓人歴史資料館」の展示（出典：内務省警保局「日本国出稼者数」『韓国警察統計』1909年）によると、1908年時点で6名の朝鮮人が北海道に在住していたことが明らかになっている。しかし、統計には含まれていない朝鮮人が北海道の各地にいたと推測できる。

淡路島の稲田家が、北海道静内や新冠、色丹島に移住させられたのが明治3年（1870年）5月であり、筆者の調査の初期の段階で明らかになった朝鮮人二世が平取でアイヌ女性から明治3年（1870年）に出生した事実は、この稲田家の北海道日高地方への移住とまさに合致する。一方で明治3年（1870年）に出生ということは、少なくとも、朝鮮人男性が平取のアイヌ女性と内縁（当時は朝鮮人の夫は正式の婚姻関係として認められていなかった）の関係をもった時期としては、明治2年（1869年）以前が妥当と考えられることから、淡路稲田家の北海道移住に伴う朝鮮人の移住は、この平取町で出生した朝鮮人とは関係ないと考えられる。

しかし、このような経緯により、鳴門・淡路から朝鮮人が馬喰として北海道日高へ移住していたことは、歴史の事実として否定できない。

3. 戦時下強制的労働動員の朝鮮人とアイヌ民族

戦時下におけるアイヌ民族と朝鮮人の繋がりについては、これまでも調査研究を通じて明らかにしてきたが、今回の調査においては、さらにその繋がりが戦後の定住化にも深く関係していることを記述しておきたい。

これまでの聞き取りにおいても、平取町幌毛志と穂別町（現むかわ町）富内を結ぶ富内線の建設では、朝鮮人労働者の犠牲者がたくさんでいたことが明らかになっている⁽²⁸⁾。

富内線敷設工事のすぐ近くの安住地区では、脱出してきた朝鮮人たちをアイヌの人々が匿い、おにぎりなどを持たせて逃がしたという証

言や、また、犠牲者の遺体が道端でもそのままに捨て置かれたことなどもこれまでの聞き取りで得られていた。

さらに今回の聞き取りでは、そうした遺体に花を手向けたり、タバコを供えて供養したこともわかった。つまり、それらの遺体に対して、周囲の人々が無関心であったのとは対照的に、アイヌの人々は人間としての感情を持ち、供養を行ったのである。道端に遺体が放置されていたことは、振内の郷土史での聞き取りにおいても確認できたが、その犠牲者に対する碑が建立されたのは、2010年になってからであった。このことも、筆者が振内の郷土史執筆を依頼されてからの調査で明らかになった後のことであった。

これに対し、安住地区を中心とした労働犠牲者の慰霊碑が穂別町によって建立されたのは1977年である。戦後から20年以上が経過し、墓地整備条例が施行されることに伴い、こうした無縁として葬られた労働犠牲者を慰霊することがようやく行われた。

さらに、今回の調査では、安住地区のアイヌの家に匿われた朝鮮人を、二風谷に住む親戚のアイヌの人々が、苫小牧まで運んだことも明らかになった。それ依然にも平取本町のアイヌの方が朝鮮人を馬車に隠し、苫小牧まで運んで汽車の切符を買って逃がした、という証言がある⁽²⁹⁾。

今回、二風谷から苫小牧へ朝鮮人を運んだというアイヌの人は、それでも逃げきれずに、再び、二風谷に戻った朝鮮人を、自分の親戚や知人に紹介して、結婚の世話をした。極めて衝撃的な証言である⁽³⁰⁾。こうして、アイヌの女性と朝鮮人男性が所帯を持ち、定住化へとつながっていった。二風谷をはじめとして、穂別町春日などに定住化が多くみられる。

4. 戦後におけるアイヌ民族と朝鮮人

戦前や戦時下のこうした朝鮮人の定住化が、

(28) 石純姫「北海道で朝鮮人とアイヌ民族は記憶されているか 第1回平取町「振内共同墓地」」『東アジア教育文化学会ニューズレター』No.10、2013年、2～3頁

(29) 石前出論文、研究資料、2006年、79～80頁

(30) 石前出報告書 <http://www.t-komazawa.ac.jp/pdf/soku.pdf>、2015年、70頁

アイヌ民族との深い繋がりの中で形成されていき、現在でもその状況は変わらない。しかし、それは語られることを憚られる事実である。

戦後においては、樺太からのいわゆる日本人の「引き揚げ」とは別に、樺太アイヌに対する強制的移住が行われた。千島樺太交換条約によって、サハリンのアイヌ民族が強制的に北海道に移住させられた事実については、多くの文献、資料が明らかにしている。その後、日露戦争によって、日本が樺太の北緯50度以南を占領した際、ほとんどの樺太アイヌの人々が戻って行ったと言われている。しかし、その際、戻らずにそのまま北海道に定住した樺太アイヌの人々もわずかではあったが存在していたことも証言から明らかになっている。

千島樺太交換条約から日露戦争までの間、一度も北海道に移住しなかった樺太アイヌの人々も、戦後、サハリンがソ連の統治下になったため、北海道への「引き揚げ」を強要された。これらの人々は、平取町、むかわ町穂別、和泉、その他の地区に戦後、定住するようになっていった。そこでも、朝鮮人との繋がりが少なくなかった⁽³¹⁾。

その一方では、日本人と一緒にになった朝鮮人の伴侶やその子どもが日本に帰ることを制限され、日本人の妻だけが日本に帰還し、朝鮮人の夫はサハリンに残り離散するという悲劇も数多くあった。

他方、朝鮮人の夫と共にサハリンに残留した日本人の妻で、夫を早くに亡くしたため、日本人でありながら、朝鮮族としてサハリンに定住している家族も少なくはない。帝国日本の統治とその崩壊は、多くの人々の間に悲惨な離散や矛盾した抑圧を生みだしてきた。

また、1960年代には、在日朝鮮人の朝鮮民主主義人民共和国への帰還事業が隆盛を極めていた。経済的に過酷な状況や差別から、幻の「祖国」へと帰還していく朝鮮人家族も多かった。他の多くの文献資料・論文で明らかにされているように、日本に移住したり、徴用された朝鮮

人は、圧倒的に現在の韓国、南側の地域から来た人々であった。もともと北の方からの移住は少なく、60年代に共和国へ「帰還」したのは、そこが故郷ではない、南出身の朝鮮の人々であった。日本赤十字社の百年史では、8万数千人が共和国へ「帰還」し、北海道からも2千人を超える人々が共和国へと移住したとある⁽³²⁾。この事業を推進した総連本部にも資料はない。日本赤十字社が膨大な名簿等の資料を保管しているが、個人情報保護法により公開は難しいと回答される状況にある。

平取、穂別からも多くの朝鮮人が共和国に帰還したが、その中には、アイヌの女性と所帯を持っていた朝鮮人もいた。たとえば、二風谷に在住するアイヌ女性は、朝鮮人の夫とアイヌの妻とその二人の子どもたちと親戚関係にあったが、この家族が共和国へと帰還したことを証言した。口に入れ墨をしたアイヌ女性が朝鮮人の夫と共に、共和国へ行ったという話も存在する。つまり、この時期の共和国への帰還者には、朝鮮人だけでなく、アイヌ女性も少なからずいたということである。

おわりに

戦時下において、朝鮮人の強制的労働動員が行われていた事実は、多くの資料が証明している。そして、その過酷な労働現場からの脱出を助けたアイヌの人々の行動は、現在の視点からすれば、ヒューマニズムや美談として語られることを可能にする。しかし、当時、そのような行為がどれほど危険を伴うものだったのかという点は、十分に考えなければならない。なぜ、アイヌの人々はそのような行為を行うことができたのだろうか。

1990年代から研究者の間においても、「支配」と「被支配」という二項対立の構図は陳腐なものとし、グレーゾーン領域をクローズアップすることによって、相対的に対立構造を無化していく傾向が出てきた。

(31) 石前出報告書 <http://www.t-komazawa.ac.jp/pdf/soku.pdf>, 2015年、8～9頁

(32) 日本赤十字社北海道支部編『北海道の赤十字その百年』1987年、625～627頁

しかし、そのような相対化は、近年のネット社会における極右的な排外主義と歴史の歪曲に、少なからず関与していると言わざるを得ない。

帝国主義における植民地支配は、すでに侵略を恒常化した事態においてシステム化された労働力の供給を推進し、それ以上に植民地支配の意識・思想を形成する。圧倒的な暴力のシステムの中で、それに抵抗することは、「悪」であり「犯罪」とされる。手足を拘束され、鞭打たれ続ける状況に対して、唾を吐く、という細やかな抵抗の行為が「反逆」や「犯罪」と呼ばれる。現在も世界の各地で展開されている凄惨な「テロ」行為に対して、それを非難し、「テロに屈しない」というスローガンは常套句となっている。しかし、そもそもその「テロ」が、なぜ起こるのか、その構造はほとんど説明されていない。圧倒的な暴力に対する抵抗は、どのような行為によって可能になるのだろうか。

権力機構が決定した大きな暴力の枠組みから末端の直接的な暴力組織に至るまで、体制に抵抗する思考力を持つことは、極めて困難なことである。決定事項を粛々と行う官僚的行為によって、最悪の虐殺が行われたことは、ハンナ・アーレントが『イエルサレムのアイヒマン』や『全体主義の起源』などで語る「悪の陳腐さ」である⁽³³⁾。

そして、このような思考停止と対極にあるのが、アイヌの人々の行為ではないだろうか。朝鮮人労働者の脱出は、厳しく罰せられ、死に至る暴行も少なくなかったと言われる。その脱出者を匿い、血縁関係を結び、定住化させるまでの行為は、まさに命掛けのものだといえる。

北海道における先住民アイヌと植民地被支配者である朝鮮人の繋がりは、従来のアイヌ像を覆すものであると同時に、「協力」と「抵抗」の狭間で生まれた一瞬の奇跡的な希望の行為として記録・記憶されるべきものであろう。その

局面を大きな視点から再考した時に見えるものは、人間として、思考力を失わず、生命の大切さや他者との共存を目指したアイヌの人々の行為ではないだろうか。

このような行為を、ことさら、アイヌ民族の崇高さや朝鮮人の悲惨さだけで語る意図はない。したたかに過酷な状況を乗り越える手段として、双方が協力したこともあるだろう。しかし、そこには、美談やしたたかな繋がりを越えて、人間を分断し、思考停止に陥らせる帝国主義の戦時下の状況があったことを忘れてはならない。

また、排外的なヘイトスピーチが日常的に行われ、在日朝鮮人だけではなく、アイヌがその標的になったことは、記憶に新しい。札幌市議会議員の「アイヌなどいない」というツイッターでの発言をめぐる、多くの論争が展開された⁽³⁴⁾。

現在においても、まさにアイヌであることによって、就職や結婚で差別されている事実があること、日々、精神的抑圧をうけ続けている存在であることは、明確に記されなければならない。そして、アイヌと朝鮮双方のルーツを持つ人々が抱える重層的な抑圧については、更に慎重な記録と表象が必要であると考えられる。

尚、本稿は2012～2014年度科学研究費補助金による研究である。聞き取り調査の中間報告の全容は苫小牧駒澤大学のホームページより科学研究費成果報告で公開されているので、そちらも参照していただきたい。

拙稿を書くにあたり、多くの方々のご教示、ご協力を得た。特に、灘郵便局主任・郷土史研究家高田知幸氏、在日韓人歴史資料館館長姜徳相先生、北海道自然保護連合環境NGO「沙流川を守る会」・山道職業訓練校・山道アイヌ語学校代表アシリレラ氏、原住・アイヌ民族の権利を取り戻すウコ・チャランケの会代表石井ボンペ氏、日本赤十字社北海道支部企画広報係井坂氏、佐藤氏、北大開示文書研究会会員・フリ

(33) アーレント・ハンナ著、大久保和郎訳『イエルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告』みすず書房、1969年
 アーレント・ハンナ著、大久保和郎訳『全体主義の起源Ⅰ—反ユダヤ主義』みすず書房、1972年
 アーレント・ハンナ著、大久保和郎・大島かおり共訳『全体主義の起源Ⅱ—帝国主義』みすず書房、1972年
 アーレント・ハンナ著、大久保和郎・大島かおり共訳『全体主義の起源Ⅲ—全体主義』みすず書房、1972年

(34) 岡和田晃、マーク・ウェンチェスター編『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社、2015年

ライター平田剛士氏の諸氏に深く感謝申し上げます。

